

少女はコミックマーケットをめざす

一九九五年八月一八日
時に、西暦
1995年
あしがき

一九九五年八月一八日

わたしとお姉さんは、東京に来てもハンバーガーショップを訪れていた。

確か初めて会った日もこうだった。図書館の休館日になんとなく歩いて帰ろうと、学校近くの商店街をふらついていたらゲームセンターで声をかけられ、話をしながら駅前のハンバーガーショップに入り、テスト勉強を見てもらい、別れ際にポケベルの連絡先をもらったのだった。

それから数ヶ月。わたしはお姉さんとよくわからない関係のまま、つきあいを続けている。わたしが通っている中学の卒業生だが、彼女はもう大学生なので先輩後輩というほどに意識はしていない。たまに一緒に遊びに行くのをデートと言ってきたりするが、よくいえばミステリアス、悪くいえば適当なことばかり言うお姉さんだから、好かれているとは思いたいけど、本気なのかは半信半疑だ。わたしとしては、何度か半泣きになるくらい感情を揺さぶられたのだから、彼女のことを嫌いだではない。でも、それはもてあそばれている感覚が嫌だったからなので、恋人として好きなのかどうかはわからない。

それ以前に、わたしはそれまでそういう風に他人をいいと感じたことがないから、比較する対象がない。

だとすると、これは恋なのかも。

泣くほど動揺させられ、もてあそばれているのならやめてほしいと感じたのだから。そんなことを考えていたら、わたしの頭の中を占領している当の本人が口元の緩んだ笑顔で戻ってきた。その手にはトイレに乗ったハンバーガーセットがふたり分。

「席取りありがと。トイレ空いてたよん」

高速バスで来るなら、適当な店のトイレで顔を洗ったりするといい。泊めてくれる人にメールでそういわれていたのので、新宿から恵比寿へ移動してコインロッカーに荷物を入れ、ここに来ていたのだった。

恵比寿からなら、宿にもコミケの会場にも乗り換えなしで行けるらしい。新宿駅はとても広く、さまようような気分だったので、ここがそういう駅ではないのが助かる。

お姉さんは顔を洗ってメイクも整えている。長めの黒髪が艶めいている。

うなずき、入れ替わりでわたしも行く。顔を洗い、少しためらうが歯磨きもし、日焼け止めを塗ったりする。

少し違和感が残るが、すっきりした。

トイレを出て席に戻ると、ふたつのトイレにハンバーガーとポテト、ドリンクが分けられていた。今日はわたしも、これから人が多いらしいコミケに行くし、高速バスではあまり食べられなかったので、ハンバーガーのセットにした。

お姉さんはいつも通り、たくさんもらった砂糖とミルクをコーヒーに入れてい

「いただきます」

「いただきます」

どちらからともなくそう言ってハンバーガーを口にすると、地元と変わらないあの味が口の中に広がる。

「んー、ファストフードは安定してるねえ」

そこまで言って、お姉さんははっとした顔になる。

「それともここならではって物の方がよかった？ 旅だし」

「特にこだわりはないですね。今はお手洗いを借りるためですし、夜や明日でも」
それに、東京ならではという物も思いつかない。雷おこしや東京ばな奈みたいな、お土産くらいしかない。

「そっかそっか。あたしも東京名物とかわかんないわ」

そう言って甘そうなコーヒーを飲んでいる。いいかげんだ。

「そういえば」

ハンバーガーを食べ終わり、ポテトを半分くらいつまんだところで、なんとなく切り出してみる。

「何？」

「コミケっていつくらいから行くんですか」

新宿に着いたのが十時前。腕時計の針はもう十一時をとくに回っている。

「人多いし、午後に着くくらいでいいらしいよ。あたし狙ってる本とかないし」
確かに欲しい物はないし、社会見学くらいの気持ちだ。

「まあ、昼休み前にここは出よっか」

「そういえば、今日って金曜でしたね」

「そーなんだよねー。夏休みだし旅行だしで、感覚がバグるっていうか、狂うよね」
そう言うのと口元を緩めてへらっと笑う。目も細くなる。わたしはお姉さんのこいう笑顔が好きだ。

「お、どーしたの？ いい顔しちゃって」

「いい顔だと思っただけですよ」

「誰がよー。あたし？」

またあの表情になる。そして、わたしはそれを見て笑顔になっているようだ。

自分の表情は特に意識しないほうだが、そう言われると悪い気はしない。

「そうです」

肯定したら、頬が緩んだ感覚。

こんな時は茶々を入れてこないお姉さんの間合いの取り方も好ましい。

そんな幸せを感じながら、ふたりはポテトの残りを食べ終えて席を立ち、JRの駅から少し離れた地下鉄の駅に向かう。

隣に行くお姉さんのジャンスカは、わたしが選んだブラウンのやつで、それもまたいい。わたしもお姉さんから勧められたシユールな絵柄のTシャツを持ってきているので、旅行中に着たい。

慣れない自動販売機で切符を買い、改札を抜けるとすぐに電車が来た。それに乗って揺られていると、三月のサリン事件ではこの路線も現場になったんだなあなどと、気にする人からは不謹慎といわれそうな感慨がわいてくる。

通過する駅も、ニュースで見たような気がする。

横に立っている人をちらとうかがうが、彼女はどこを見ているかわからない目で手すりを握っている。

こういう時、わたしたちは言葉を交わさない。

常に話をし続けるのは、話し続けていないといけないような気持ちになってしまうので、沈黙したままでも用事があるまで放っておいてくれるお姉さんとは気が合う。

そんなことを以前話したら、あたしも口下手だからさ。などと言われたけど。それが心地いい。

途中、結構人が乗ってきて、わたしたちも含めて築地でそれなりの量が下りる。

「これのほとんどがコミケ組かー」

お姉さんが嘆息しているが、確かに多い。

「朝はもっと凄いらしいけどね」

そうも言われた。その流れに乗り、駅を出て通りを歩く。横には大きなお寺。空はすっきりとした晴れだが、その分日射しが痛いほどだ。

「ちょっと不格好だけど、これ被っとく？」

お姉さんがバッグから取り出したのは、タオルだった。頭に直接日光を受けないためにはいいかもしれない。ありがたく借りることにする。その端を両手で持って頭に乘せていると、なんだか体育祭みたいだ。

お姉さんもタオルを被り、ふたりで歩く。できるだけ建物のある場所を通っているつもりだが、ちょうどお昼時なので影が短い。

暑さに辟易してきたところで、大きな橋が見えてくる。

「あれが勝鬨橋だって」